

因果と物語 —物語的な因果関係と必然性

三ツ野 陽介 (Yosuke Mitsuno)

国際武道大学

われわれは自らの生や、それを取り巻く様々な出来事を、物語的な仕方理解している。本発表では、このような立場に基づいたうえで、物語において機能している因果関係が、どのようなものであるのかを検討する。

その際、特に、科学などで用いられる法則的な因果関係と異なり、物語における因果関係は時制を伴ったものであることに着目したい。

物語は過去形で語られるものである。例えば、「私は今日までこうして生きてきました」と語るのが物語なのである。その一方で、「明日からもこうして生きていこう」と語る未来形は、決意表明や予想の類であって物語ではない。物語は、これから起きることについては語りえない、解釈的な語りの形式なのである。

多くの物語はまた、すでに現実化した出来事について、その原因を過去に求める因果的な説明である。例えば、「いまの私の成功があるのは、過去の努力があったからだ」のように語るのが物語的な説明である。その一方で、物語は未来の因果関係については語りえない。すなわち、「いまの私の努力は、将来の成功に繋がるだろう」というのは願望や予想であって、物語ではないのである。

これに対して、原因と結果についての科学的な説明は、時制の制約を受けない。「水温が 100 度に達したために、沸騰した」という過去形の文は、物語とは言えない。それは科学的な説明であり、「水温が 100 度に達したら、沸騰するだろう」という未来形も、決意表明や願望ではない。これらの説明では時制は重要な意味を持っておらず、「水は一気圧 100 度で沸騰する」という無時制的な法則のほうが本質なのである。

科学的な決定論は、このような無時制的な因果法則が、過去と未来のすべてを支配していると見なす説である。この立場においては、過去を決定づけてきた法則的な因果関係は、未来にもそのまま延長されるのである。

これに対して、物語的な説明においては、過去からの因果の連鎖が、現在において行き止まりになる。

では、私たちが物語において用いる因果関係は、法則的な因果関係ではないのだろうか。例えば、「いまの私の成功があるのは、過去の努力があったからだ」という説明は、「努力は必ず報われる」という無時制的な因果法則を背景にしてはいないのだろうか。

確かに一見すると、「いまの私の成功があるのは、過去の努力があったからだ」と自らの

来歴を語ったその人は、「努力は必ず報われる」という因果法則を信じているように見える。しかし実際には、彼がそう信じている必要はないのである。彼が「努力は必ずしも報われるわけではない」とか「努力なしで成功する人もいる」と考えていたとしても（つまり、努力は成功の十分条件でも必要条件でもないと考えていたとしても）、それでもなお彼が、自分の成功の原因を過去の努力に求めることはありうるのである。

すなわち、私たちが、物語的な説明において用いる因果関係は、法則的な因果関係とは別のものであり、また、未来を拘束するものでもないのである。

さらに、本発表の結論部では、自由意志と決定論をめぐる議論に介入し、物語的な因果関係によって説明される必然性は自由と両立する、という主張を試みたい。